復刻版 子供の世紀

「愛せよ、敬せよ、強く育てよ」

「子どもの権利」という概念が世界的に認められはじめ、優生学が革新的な学問だった一九二〇年代。まだコドモは看過され、玩弄視され、虐待されている。コドモの福利を増進するために国民的な動員を——と、子どもの人格の尊厳を謳って設立された大阪（日本）児童愛護連盟の機関誌。

連盟は、大阪市の市民館を拠点に、女性団体や学生たちの協力を得て、子どもの健康福利をめざした「あかんぼ審査会」を開催。関西だけでなく東京・名古屋・札幌・朝鮮・台湾等々、運動は大きく展開した。

医師・看護師等による健診によって子どもの健康への意識を高め、母親への詳細な聞き取り調査によって、出産や育児にまつわる民俗学的な様相や子育てへの意識を検証した。

二一年にわたる活動のなかで、貧困と子ども、戦争と子ども、災害と子ども、健康と子ども、障害のある子ども、保護や支援の必要な子ども、働く母親、産児制限、母子保健、私生児差別など子どもに関するあらゆる情報を発信しつづけた。

戦前期および戦時下の児童保護、教育、児童文学、民俗学、児童心理、母子保護、優生思想、女性問題等を探究するための第一級資料、待望の復刻！

揃定価●37万5,000円＋税
配本●全5回配本
推薦●永岡正己・喜多明人・上田信道・石月静恵・安井眞奈美

全15巻

1923
—
1944

六花出版

現在の児童憲章に受け継がれた「子ども中心社会」の思想

復刻版刊行によせて

大正期に発刊された『子供の世紀』という雑誌をご存知でしょうか。この雑誌は、一九二三年五月に大阪児童愛護連盟（のちに日本児童愛護連盟）の伊藤悌二の編集で『コドモ愛護』という誌名で創刊され、以後『子供の世紀』に改題してからも毎月一回公刊し、一九四四年四月で終刊した雑誌です。この二一年間に二五〇冊を送り出し、現在確認されるだけでも総頁数は二万二、〇〇〇頁以上に及びます。

そして、もっとも注目したいのは、この雑誌が、大正期の新しい潮流を背景に、子どもの尊厳（権利）を啓発する目的で、多様な領域の執筆者が最新の考え方を、一般の読者にわかりやすく紹介した、日本で最初の雑誌だということです。

その領域を今日的に分類すれば、母子保健、保育、子育て支援、児童福祉、少年非行、学校教育、障害児教育、児童心理、児童文化、児童文学、児童絵画、児童演劇、優生思想、ジェンダー、出産・子育て風俗――など多岐にわたる画期的なものになっています。

このため、本雑誌は、先の各領域の当事者側からの、昭和戦中期までの変遷を実践的にたどれる資料として欠かせないといえます。また、戦争末期に幕を閉じた『子供の世紀』の思想は、敗戦後、子どもの権利をトータルに保障しようとする児童福祉法や児童憲章に受け継がれ、現在の「子どもの権利条約」に連なる貴重な存在でもあります。

――菊池義昭／内田塔子（解説者）

『子供の世紀』関連年表

1921 大正10	6月	大阪市立市民館（のち北市民館）設立。館長 志賀志那人
	10月	大阪児童愛護連盟設立
	11月	児童愛護宣伝デー（大阪）
1922	4月	少年法制定
	5月	第2回児童愛護宣伝デー（大阪・東京・京都・神戸・広島）
	10月	第1回大阪乳幼児審査会
1923	4月	第1回大阪乳幼児愛護宣伝デー
	5月	機関誌『**コドモ愛護**』創刊
1924	2月	『**コドモ愛護**』、『**子供の世紀**』に改題
1925	5月	岐阜県各郡市で乳幼児審査会実施
	10月	第1回全東京乳幼児審査会
1926	3月	第1回全関西小学児童健康（口腔）審査会
1927 昭和2	5月	乳幼児愛護デー（全国一斉）
	10月	第1回北海道乳幼児審査会
	12月	第1回堺乳幼児審査会
1928	4月	学問と実際に基ける優良コドモ必需品展覧会
	5月	第1回岸和田乳幼児審査会
	9月	神戸乳幼児審査会、京城乳幼児審査会
1929	6月	第2回五条児童愛護大会
1931	5月	第1回和歌山乳幼児愛護大会
	8月	「虚弱」児童のための夏季林間学校
1932	10月	第1回中京乳幼児審査会
1933	4月	児童虐待防止法制定、5月　少年教護法制定
1934	4月	北市民館で大阪乳幼児保護協会の相談事業開始
	6月	第1回東京子供優良必需品展覧会
1935	4月	第1回台湾児童審査会
1937	3月	母子保護法制定
1940	8月	戦時下の育児展覧会（東京）
1941	9月	戦時下の育児展覧会（大阪）
1943	7月	第15回記念全東京乳幼児審査会
	10月	第21回全大阪乳幼児審査会
1944	4月	『**子供の世紀**』終刊

内容見本

1927年9月

こどもの心に觸れるために【上】

——兒童心理學のこと——

青木誠四郎

一、はしがき

私はこゝで子供の心の姿に觸れて見たいと思ふ。けれども子供といつても嬰兒の時代もあれば、幼兒の時代もあり、あるひはもう青年の時期のおし迫つてゐる兒童期もある。さう云ふ時期によつて子供の心はだん〳〵すがた、かたちを變へてゆくことは云ふまでもない。では、その時期内のことを說いてよいのか、時によるうつり變りを順々に說けばよいのか。

そこで私は特にこゝに實際の仕事にたづさはつてゐる人たちが、その仕事の對象としてゐる樣な子供の時期、そしてある特種の子供の、特種の心をめあてにしていつて見たい。

まづ生れてはじめてあらはれる心の働きが、どう云ふ經過をとつて現れて來るかを見たい。精神の發生とでもいつてよいだらうか。さう云ふことは極めて幼い子供を取扱ふときに考へられていなくてはならないが、また時には自身自分の子供の生れ出て、どんな風に心の働きが現れて來るかについてその知識をも示してくれ、家庭に於ける育兒に多少の參考を提供し得ること、思ふ。

幼兒の對象として仕事にたづさはつてゐられる人は極めて多いだらう。たとへば託兒所、あるひは育兒事業の如き——さう云ふ時にまづ私たちが知らなくてはならぬのは、その自體に關する知識と共に、心の働きについての理解であらう。さう云ふ幼兒の心を最もよく示してくれるのは、子供の本能生活の姿であらうと思ふ。そこには子供の生活の出發點があり、またそこにはいはゞ原存的な心の狀態が見られると思ふ。

かう云ふ原存的な心の働きは、經驗を經て發達して來る。起きあがつて來ると云ふのか、伸びてゆくと云ふのか、

1927年8月

震災地の子供

土屋充

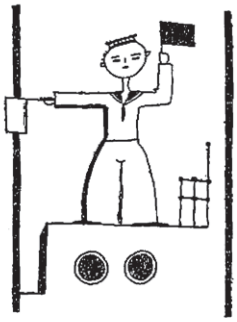
宮津のつぎの文珠までは天橋立見物で來ることもあらうが、それから先へは餘り思へる峰山網野線、學校の土堀や工場の煉瓦づみの煙突が倒れてをるのを見ただけだつた宮津、文珠を過ぎ、繪のやうな美しい內海もつきて岩瀨口、山田へと進むにつれて慘害のアトはまざまざと擴げられてをる。家みなが燒拂はれた口大野驛では縮緬本場と白い大きな廣告板が立つてゐるのが目立ちました。

峰山の驛から町までの十何丁、京都府のトラックに便乘した私は、聞きしに勝る慘たらしさにツイうつかりして、も少しで電線に頸をかけられる處でした——電柱が燒けたので電線もそれほど低く張つてあるのです。

私が行つたのは四月の一日であつたが、一千十二戶のうち被害のないのは唯の八戶といふ此の峰山の町では、大地震後もう一ケ月にもならうと云ふのに、道の兩側にしんに佗しくバラックが立つてをるだけで、復興の氣運どころか後片附にもまだ手が着いてないのではあるまいかと思へる程でした。

バラックの內で床の代りに、または床のあるバラックでは布團代りにされる藁を積んだトラックは役場、その向ひが警察のまへで止つた。朝日新聞社の全關西聯合婦人會經營の託兒所のある零平神社はこゝから二丁たらずと聞いて、たうとう來ましたねえと、と勵まし合ひながら重い荷物をさげた私達——墨染の法衣まとふ尼僧ふたりと私は川岸で「妻よし娘かよ女中一人燒死」と記した棒杭を見ました。その家の唯一人いき殘つた主人には後に逢ひましたが錢湯へ出掛けてゐて助かつたのださ

1927年9月



東京赤ちやん審査會の記

——全關東乳幼兒審査會概況——

伊藤悌二

朗かに國家のために

六月六日

會場となるべき上野松坂屋七階ホールの諮詢設備は、前日に松坂屋當局部の萬崎、石田、山中、太田諸氏の周到なる御盡力で全く整ふた。昨夜も鹽谷小波先生や奉天旅行中の土屋健氏よりそれ〴〵の立場から祝辭が送られて來たのだつたが、今朝も八時頃下總茂原の吉田氏と播磨の岡田播陽翁から祝電があつたのは嬉しい事であつた。曰く「朗かに國家のために働かれよ」一縷々々。

今回の事業を心配して記者の宿に泊つて呉れた、甥に當る醫大生の睦郎と早朝會場に赴いた。慶應の鎭目博士は私共より早く到着され看護婦諸姉を指揮されて御準備中だつた。

日本齒科からは濱野博士が九名の醫員諸氏を引率されて來て、今か今かと開會を待つて居られる、又組織解剖學專攻の金子先生は母子の顏色の審査にあたられる筈となつた。慶應の和泉博士と岡安看護婦は、本聯盟が大正十五年に東京で審査會開催の時からの功勞者であることを茲に特記したい。

定刻の開會を待ち遠しと計りに、電報通信社の添田氏始め、各新聞社の寫眞班が詰めかけて各所にマグネシュ

1932年7月

文化の視点をもつ先駆的な雑誌

◉永岡正己

推薦します！

『子供の世紀』は先駆的な雑誌である。その発展は、大阪市立北市民館の活動とも密接に結びつき、そこに集った人々の子どもへの思いが示され、セツルメント運動、福祉と文化をつなぐ当時の潑剌とした精神が溢れていた。志賀志那人、伊藤悌二、高尾亮雄、そして三田谷啓、山枡儀重、村島帰之といった人々の働きが、どのようにこのような流れを生み出していったのかを考えるだけでも意味深い。

編集を守った伊藤悌二と活動を支えた志賀志那人は、もともと若き日の活動のなかで同志的な関係にあったが、その志向には民主主義運動、文化運動、人格運動的な面が組み込まれていた。そして子どもを中心においた視点は、誌名に象徴されるように児童研究、児童保護という枠組みを超えて、相互教育、文化、芸術的な視座、社会のビジョンに充ちた、独特の香りのする魅力的な誌面を生み出したのであった。初期の思いがどのように受け継がれたかは、志賀が急逝した一九三八年に伊藤により企画された追悼特集にもよく示されている。

『子供の世紀』の意義には、「あかんぼ審査会」などの取り組みをはじめ、子どもの福祉の先駆的活動・運動の生成過程が如実に示されていること、大正デモクラシーから太平洋戦争下にいたる子どものおかれた状況とその推移が手に取るようにわかること、そして戦時下にかけて軍事や人的資源の思想がどのように浸透していったかという変質過程をも示されていること等がある。

本資料には幻となってきた欠号がいくつかあるが、復刻版では、現時点で可能なかぎりのものが収録されている。『子供の世紀』が、復刻によって広く読まれ、幅広い専門領域にわたって活用されることを願っている。

（日本福祉大学教授）

戦前期の子どもの現実を明らかにする復刻

◉喜多明人

六花出版から大阪児童愛護連盟の機関誌『子供の世紀』（一九二三―一九四四）が復刻される。

この雑誌の復刻で思い出すのは、このころ活躍した子どもの権利の提唱者、賀川豊彦（一八八八―一九六〇）の言葉である。かれは、国際連盟「ジュネーブ子どもの権利宣言」を日本に紹介しただけでなく、一九二七年当時の日本の乳幼児死亡率が明治期よりも急増（一〇〇〇人に対して八八人から一七〇人以上へ）していた現実を直視し、このような事態を招いたのは、「我社会が子供の第一の権利たる生きる権利を尊重しないからである」と述べて、子どもの「生きる権利、食らう権利、眠る権利、教育を受ける権利……親を選ぶ権利」など九つの子どもの権利を提唱した。

このような子どもの権利の社会的な規範形成の土台となったのが、大阪児童愛護連盟の活動であった。この連盟は、子どもは親の所有物ではなく、社会において子どものいのちと健康を守ることが大切であることを提唱し、全国各地で乳幼児審査会（当時は「赤ん坊審査会」と称した）を毎年開くなどして子育ての意識啓発を行うとともに、雑誌『子供の世紀』を刊行し、子どもの生活の現実をデータで示してきた。この貴重な記録の復刻を大いに歓迎したい。

（早稲田大学教授）

子どもの問題を社会的視点から捉えた稀覯雑誌

◉上田信道

私がまだ学生であった頃、天六（大阪市北区天神橋六丁目）の交差点近くに、ツタの絡まる古びたビルがあった。いまは取り壊されてあとかたもないこの建物が北市民館である。初代館長に志賀を擁し、先進的な社会福祉事業に取組んでの成果をあげた。大阪児童愛護連盟もここに本拠を置き、『子供の世紀』誌を刊行している。

いうまでもないことだが、この雑誌の主たる読者は育児中の母親である。だが、その身上は単なる育児・保育雑誌の域を超えて、社会的な観点から子どもを取り巻く諸問題を総合的に把握しようとしたところにあった。すなわち、子どもの遊戯・遊園地・学用品・読書に関する調査をはじめ、子どもの非行に目を向けた感化院でのアンケート調査にいたるまで、意欲的で貴重な記事を多く掲載している。賀川豊彦の童話、高尾亮雄の児童劇脚本、外国児童文学の翻訳、童謡など、子ども向けの読物のほか、子どもに関する写真などが多く掲載されたこともまた特筆すべきであろう。

このように育児・保育・教育・児童福祉・児童文学・児童文化などの諸分野を歴史的に考究するために、欠かすことのできない第一級の資料であるにもかかわらず、同誌はこれまで目にすることすら稀であった。しかし、ここにようやく復刻版が刊行される運びとなった。研究者や学生のみならず、斯界に興味を持つすべての関係者にご一読をお奨めしたい。（岡崎女子大学教授）

女性史研究にも貴重な資料

◉石月静恵

このたび大阪児童愛護連盟の機関誌『子供の世紀』が復刻される。大正デモクラシー期から戦時下までの子どもそして保護者に関わる多様な記事は、非常に貴重である。

執筆者には、志賀志那人をはじめ、山枡儀重、高尾亮雄など大阪児童愛護連盟の人々はもちろん、賀川豊彦、山室軍平、杉山元次郎など社会運動家、永井柳太郎、三輪田元道などの教育家、さらに岸田劉生や柳田国男などがいる。文学者の与謝野晶子、岡本かの子、平林たい子、村岡花子だけでなく、平塚らいてう、山川菊栄、河崎なつ、金子しげり、ガントレット恒子、山室民子、神近市子、丸岡秀子、北村兼子、恩田和子などの名も見られ、女性史の立場からも興味深い雑誌である。

連盟は、「児童愛護週間」や「赤ちゃん審査会」（乳幼児審査会として全国に普及）などを開催して、子どもの栄養や衛生など医学的知識の啓発運動を行うと同時に母親たちへの詳細な聞き取りも行った。そのとき大阪の女性団体や女子学生たちもおおいに協力している。

女性史、保育史、社会事業史研究など種々の分野での活用が期待される。

（桜花学園大学教授）

変わりゆく出産・育児を見つめなおす貴重な報告

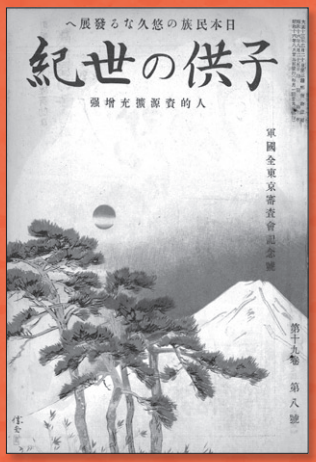
◉安井眞奈美

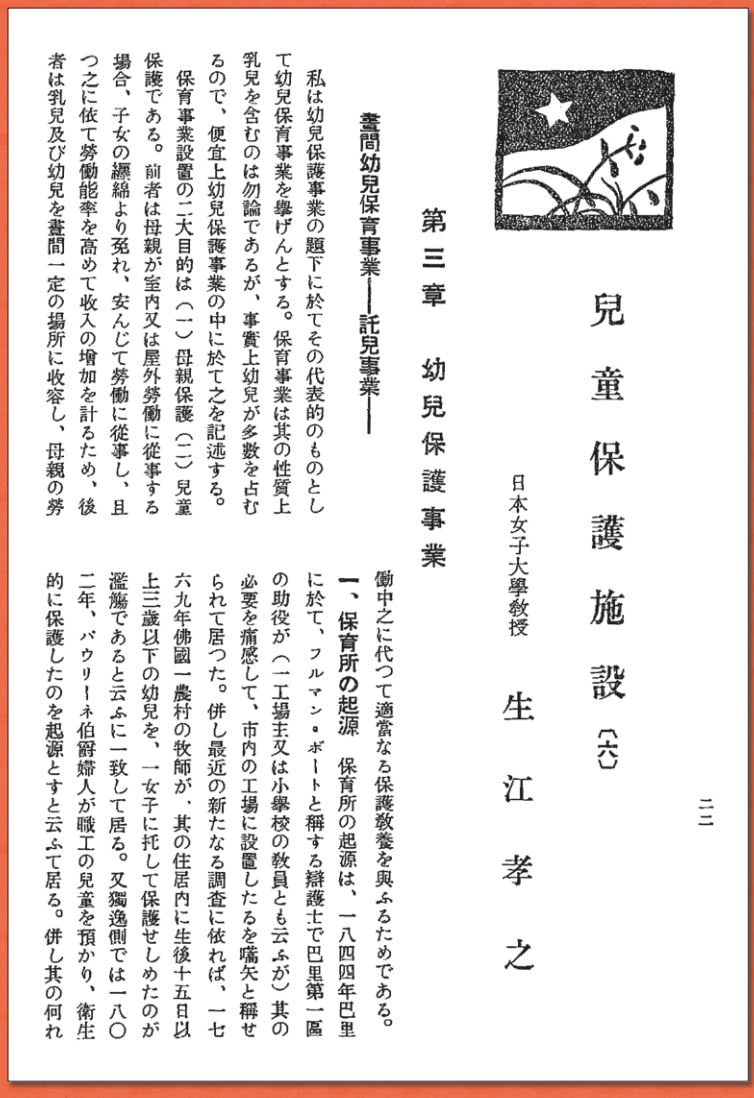
大正末から昭和戦前期にかけて、全国でなんと多くの「赤ん坊審査会」が行われていたことか。「健康優良児」を育てることは子ども自身のため、親のため、そして国家社会のためである、と雑誌『子供の世紀』の発行者・大阪（日本）児童愛護連盟は謳う。

本誌は、およそ子どもに関連することを、食事から玩具、叱り方や褒め方、歯の手入れ法、子どもの身体と病気にいたるまで、さまざまなトピックについて医者や教育者、研究者など当時の知識人がわかりやすく解説した一級の資料集である。もちろんそれだけにとどまらない。子どもの名前の付け方、妊娠・出産・産後の心得、安産祈願、嫁と姑の衝突の理由と解決策など、出産・育児に関する習俗の貴重な報告としても読める。

わたしたちは、雑誌『子供の世紀』の復刻により、近代に入って大きく変化してゆく出産と育児、そして人々の暮らしそのものを、ユニークな記事と豊富な口絵写真、そして詳細な記述から、改めて見つめなおすことができるだろう。

（天理大学教授）





二二

兒童保護施設〔六〕

日本女子大學教授　生江孝之

第三章　幼兒保護事業

晝間幼兒保育事業——託兒事業——

私は幼兒保護事業の題下に於てその代表的のものとして幼兒保育事業を擧げんとする。保育事業は其の性質上乳兒を含むのは勿論であるが、事實上幼兒が多數を占むるので、便宜上幼兒保護事業の中に於て之を記述する。

保育事業設置の二大目的は（一）母親保護（二）兒童保護である。前者は母親が室内又は屋外勞働に從事する場合、子女の繃縛より免れ、安んじて勞働に從事し、且つ之に依て勞働能率を高めて收入の增加を計るため、後者は乳兒及び幼兒を晝間一定の場所に收容し、母親の勞働中之に代つて適當なる保護敎養を與ふるためである。

一、保育所の起源　保育所の起源は、一八四四年巴里に於て、フルマン・ボートと稱する辯護士で巴里第一區の助役が（一工場主又は小學校の敎員とも云ふが）其の必要を痛感して、市内の工場に設置したるを嚆矢と稱せられて居つた。併し最近の新たなる調査に依れば、一七六九年佛國一農村の牧師が、其の住居内に生後十五日以上三歲以下の幼兒を、一女子に托して保護せしめたのが濫觴であると云ふに一致して居る。又獨逸側では一八〇二年、バウリーネ伯爵婦人が職工の兒童を預かり、衛生的に保護したのを起源とすと云ふて居る。併し其の何れ

1927年9月

1943年6月

編集復刻版『戦後初期人身売買／子ども労働問題資料集成』全10巻

本編集復刻版は、第Ⅰ部 人身売買編 では女性や子どもの人身売買に関する雑誌記事や公文書資料を含む一九四五年より六〇年頃までの貴重資料を収録し、第Ⅱ部 子ども労働編 では労働と呼ばれた子ども労働の実態を明らかにすると同時に不当労働や脱法と呼べるような年少労働の問題を示すパンフレットや書籍の資料を収録した。

児童福祉史・児童教育史・女性史のみならず労働史・占領期研究等、人権の問題に取り組むすべての人々・研究機関に呈するものである。

◉A5判（第1巻～第6巻）・A4判（第7巻～第10巻）・上製・約4、000ページ
◉揃定価――196、000円＋税〈全3回配本〉
◉編・解説――藤野豊：人身売買資料
石原剛志：子ども労働資料
◉推薦――逸見勝亮、角田由紀子、
岩田正美、増山均

「保育」の戦後史 幼稚園・保育所の普及とその地域差

戦後の保育に関する発展過程や課題を施策とその地域差に着目し検証した意欲作。

◉湯川嘉津美＝推薦
◉松島のり子＝著／A5判／定価＝6、000円＋税

DVD ある託児所の一日 近代日本ドキュメンタリー・アーカイブ No.3

東京の砂町友愛園での保育の映像記録。一九三三年・四〇年

◉汐見稔幸＝推薦
◉松本園子＝解説／定価＝10、000円＋税

編集復刻版『昭和期「銃後」関係資料集成』全9巻

アジア・太平洋戦争の時代（1931～45年）、日本軍・政府と地域社会は、戦場で戦う兵士に思い残すことなく命を捧げさせるために、もうひとつの「戦場」である「銃後」をどのように慰撫し、激励し、また管理し、抑圧したのか。忘れ去られた動員のありよう、軍事援護の実態の貴重資料を呈示し、明らかにする。

兵士の遺家族への対応のありよう、子どもたちの作成した慰問文集等詳細な記録を収録。

戦時生活史、女性史、軍事史、軍事教育史をはじめとする近代史研究に必備の「銃後」資料66点を厳選し復刻。

◉A4判／上製／総3、300ページ
◉揃定価――225、000円＋税
〈全3回配本〉
◉編・解説――一ノ瀬俊也
＊解説は第1巻巻頭に収録
◉推薦――吉田裕、加納実紀代、
成田龍一、前田一男

動員される母親たち 戦時下における家庭教育振興政策

子どもの皇民化教育は家庭教育から、家庭教育には母親の教育から、という趣旨で展開された母親への教化・組織の振興政策を検証。

◉奥村典子＝著／A5判／定価＝4、000円＋税
◉清水康幸＝推薦

「女教員」と「母性」近代日本における〈職業と家庭の両立〉問題

低賃金と家事育児に悩んだ戦前期の小学校女教員の問題を「母性」から読み解いた著。

◉小山静子＝推薦
◉齋藤慶子＝著／A5判／定価4、000円＋税

復刻版

子供の世紀

全15巻

刊行概要

- 体裁――A4判・上製・総約5、700ページ
- 揃定価――375、000円＋税〈全5回配本〉
- 解説――菊池義昭（東日本国際大学教授）
  内田塔子（東洋大学准教授）
  解説は第1巻巻頭に収録
- 推薦――永岡正己（日本福祉大学教授）
  喜多明人（早稲田大学教授）
  上田信道（岡崎女子大学教授）
  石月静恵（桜花学園大学教授）
  安井眞奈美（天理大学教授）（順不同）

第1回配本

2015年12月刊◉本体75,000円＋税 ISBN978-4-86617-000-8

第1巻●1巻3号～4巻12号（1923年7月～26年12月）
（創刊時の誌名は「コドモ愛護」）
第2巻●5巻1号～6巻4号（1927年1月～28年4月）
第3巻●6巻5号～7巻6号（1928年5月～29年6月）

第2回配本

2016年5月刊◉本体75,000円＋税 ISBN978-4-86617-004-6

第4巻●7巻7号～8巻10号（1929年7月～30年10月）
第5巻●8巻11号～9巻12号（1930年11月～31年12月）
第6巻●10巻1号～11巻2号（1932年1月～33年2月）

第3回配本

2016年11月刊◉本体75,000円＋税 ISBN978-4-86617-008-4

第7巻●11巻3号～12巻4号（1933年3月～34年4月）
第8巻●12巻5号～13巻6号（1934年5月～35年6月）
第9巻●13巻7号～14巻8号（1935年7月～36年8月）

第4回配本

2017年5月刊◉本体75,000円＋税 ISBN978-4-86617-012-1

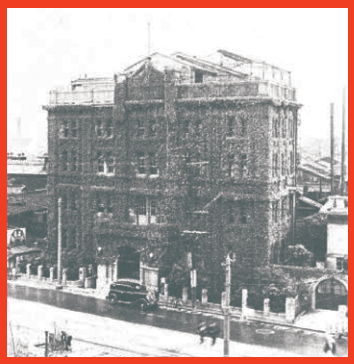
第10巻●14巻9号～15巻10号（1936年9月～37年10月）
第11巻●15巻11号～16巻12号（1937年11月～38年12月）
第12巻●17巻1号～18巻2号（1939年1月～40年2月）

第5回配本

2017年11月刊◉本体75,000円＋税 ISBN978-4-86617-016-9

第13巻●18巻3号～19巻4号（1940年3月～41年4月）
第14巻●19巻5号～20巻6号（1941年5月～42年6月）
第15巻●20巻7号～22巻4号（1942年7月～44年4月）
付録CD-ROM（総目次デジタルデータ）

＊次の各号は未見のため今回の復刻版には収録できませんでした。お心当たりのある方はぜひご教示ください。
創刊号（大正12年5月号）・6月号・9～12月号、大正13年1・2・4～12月号、第3年（大正14年）1・3～10号、第4年（大正15年）2号、第21巻（昭和18年）12号、第22巻（昭和19年）3号



＊表示価格はすべて税別。

六花出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-28 電話 03-3293-8787 ファクシミリ 03-3293-8788